

企業事例2 [寝具の製造・販売]

寝具販売から 天然素材の蚊帳を主力商品に



麻100%のカラム織で作られた蚊帳

◎有限会社菊屋（静岡県磐田市中町）

静岡県磐田市にある寝具専門店の有限会社菊屋は、販売商品の一つである日本の蚊帳を、文化として残そうとしている。96年からお客さまの要望を取り入れた商品開発に取り組み、現在では蚊帳が商品構成の7割を占めている。

ホームページ立ち上げると 天然素材の蚊帳の問い合わせが殺到

昔は町の布団屋にはどこにも蚊帳が置いてあったが、殺虫剤による蚊の減少と、網戸の普及により昭和40年をピークに蚊帳の使用が減少。日本の夏の風物詩だった蚊帳は昭和60年前半にはほとんど使われなくなり、平成12年には蚊帳業者の組合も解散した。

静岡県磐田市にある従業員3人の寝具専門店、有限会社菊屋の創業は昭和26年。社長を務めるのは2代目の三島治氏(56)。三島社長が子供のころは高度成長期で、菊屋の前身である「三島屋ふとん店」は開店前から行列ができるほど繁盛していた。昭和53年に「菊屋」へ改名したが、その3日後に創業者である父・昇さんが亡くなり、治氏はやむなく勤めていた会社を辞めて家業を継いだ。それからは悪戦苦闘の日々だった。折しも大規模小売店が郊外に進出し始め、専門店で購入しなくとも寝具が手に入るようになったからだ。90年代初頭には売上が全盛期の半分に落ち込んだ。資金繰りにも困ったため、商品を持って飛び込み営業を行い、現金で販売する日々が続いた。

こうした状況を打開するため、平成8年に三

島社長は自社のホームページ「anmin.com(安眠ドットコム)」を立ち上げ、好みの枕をオーダーできるようにした。このアイデアは功を奏し、少しずつ枕の注文が増えていった。

ホームページを作って一番驚いたことは「天然素材の蚊帳は売っていますか？子どもがアトピー性皮膚炎で殺虫剤を使えないため、肌にもやさしい天然素材の蚊帳がほしいのです」など、蚊帳に関する問い合わせが全国から寄せられたことだ。いままでは仕入れていただけだったが、三島社長はこうした声に応えるためにオリジナルの蚊帳を作ろうと決意する。

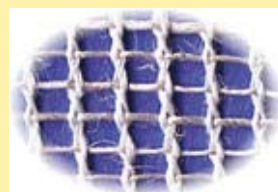
ニーズに応え麻100%の蚊帳製作 商品構成の7割に

それからはホームページに寄せられるお客さまの要望の一つひとつ目を通し、商品作りの参考にしていく。三島社長は地元の機屋(はたや)と縫製屋に協力をあおぎ、試作品を作り始めた。何度も試行錯誤を重ね、ついに平成11年に肌が弱い人向けに、天然素材である麻100%の蚊帳を開発。平成12年には底に生地がついていてファスナーで密閉できるムカデ対策用の蚊帳を

図 従来の蚊帳との織り方の違い



●従来の「平織」



●菊屋の「カラム織」

◎三島社長の蚊帳復活への取り組み

- Webを通じてマーケティングを展開
- 高品質・安全性を求めお客さまの声を反映した商品開発
- 新たな販路を開拓

作る。こうした商品の反響は意外に大きかった。

菊屋オリジナルの蚊帳は織り方にもこだわっている。同社は縦糸を絡ませながら横糸を固定する「カラミ織」の蚊帳を5年の月日をかけて開発。強度が増し、洗濯機でも洗えることから好評を得ている。

その後も蚊帳作りに努め、その種類もいまや約70種類まで増えた。同店の主力商品は枕から蚊帳に変わり、商品構成の70%を占めている。ちなみに一番の売れ筋商品は麻で作られた蚊帳だ。中心価格帯は5000円から30000円。いまでは海外も含め、毎年平均して1000張りの注文が安定して来るようになった。注文を受けてから機屋から生地を縫製屋に納入して生産を始め、1週間から10日ほどで完成する。お客さまの声をよく“聞く屋”として、様々なオーダーメイドにも誠実に応えている。

子供たちを守るため

マダガスカル共和国に寄贈

アフリカでは、5才未満の子供が毎年100万人以上、マラリアで命を落としている。

三島社長は「よい睡眠は人々を幸せにし、世界を救う」をモットーにしている。そうした思

Profile

三島 治 (みしま・おさむ)

有限会社菊屋 代表取締役
1956年静岡県磐田市生まれ。寝具販売のほか、「日本睡眠改善協議会」の公認インストラクターとして安眠講座を行う。著書に『どうぞ蚊帳の中へ』。
住所：静岡県磐田市中泉243
TEL：0538-35-1666

ホームページ 安眠.com 検索



いから、平成8年に三島社長は特にマラリアが深刻だったアフリカのマダガスカル共和国に蚊帳300張り、平成17年にはカメルーンへ100張りの寄贈を申し出た。少しずつ「蚊帳の輪」は世界にも広がっている。

麻製の蚊帳が節電の夏に 多数の注文が来た

昨年は東日本大震災の影響によって、例年より3割増の売上となった。三島社長はその理由を「吸湿・発散性に優れた麻の効果で蚊帳内の湿度が低下し、体感温度が2、3度下がるので寝苦しい熱帯夜も快適に過ごせるのではないのでしょうか」と推測する。今後は蚊を寄せ付けないためだけのものではなく、デザ



パリの国際博覧会でグッドデザイン賞を受賞した蚊帳「カクーン」

イン性に優れたインテリアとしての蚊帳の販売にも力を入れていくことで販路を広げていく。

「仲間はずれといった意味合いで、『蚊帳の外』という言い回しがありますが、蚊帳の中は人と人とがふれあう場所としてもものすごく快適な空間です。こんな時代だからこそ、日本文化としてお客さまとともにこの蚊帳を残していくのが私の使命だと思っています」

取材・文／本誌編集部